

Title	先覚者とその情熱
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1979, 28, p. 2-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

先覚者とその 情

財団法人 大 阪 防 疫 協 솦

事 長 辻

野

直 ___ 郎

方 洪

庵と

が大阪市北浜三丁目にある(国 町人の学問「塾」適塾(適々塾) の財政的援助を受けて運営した 学)を受けず自主的或いは商人 の重要文化財、 または藩主等為政者の保護(官 ければならない。いわゆる幕府 文化七年~文久三年」を挙げな 字は公裁(一八一〇~六三年) として一緒方洪庵先生、 樹立に大いなる功績のあった人 の普及につとめ近代日本医学の 吾が浪速の地にあって西洋医学 史跡、 大阪大学 名は章

たわら蘭学塾 「適塾」(適々斉 保九)大阪に帰り開業した。そのか 長崎に行きオランダ商館長ニー マンに従って学び、一八三八(天 学を修めた。 十七歳にして医学を志し大阪に 信道、宇田川玄真らについて蘭 出て中天遊の門に入った。二十 緒方洪庵先生は備中、足守の人 歳の時さらに江戸に赴き坪井 一八三六(天保七)

> の人材が続出した。このことは 学の発祥の礎となり且その系統 近代医学界のためにも、 ように緒方洪庵先生によって浪 た国家のためにも喜ぶべきこと 速の地はすでに、近代西洋医 洋医学所頭取」となった。この あった。一八六二(文久二)江 近代医学の樹立に大いに功績が に訳書を公にし西洋医学の普及 イツ医フーフエラントの著書の コレラ対策書「虎狼瘌治準」ド に学んだ。医学書「病学通論」 久坂玄瑞、 蔵六(後の大村益次郎)福沢諭 て多くの人材を育成した。村田 左野常民、 塾ともいう)を起し情熱を傾け 幕府に招かれて「奥医師兼西 「扶氏経験遺訓」など精力的 長与専斉らを出した。また 橋本左内、大鳥圭介 箕作秋坪らもこの塾 はたま

二等待合室で府立大阪医科大学 ときは昭和四年初夏、 阪大微研創、 設立の原点 大阪駅一、

> 川虎次郎氏「谷口腆二」より抜 9 学長と谷口教授のこの会談が後 し、その栄転見送りの日の楠本 帝国大学予算を援助してくれた 予算立案の責任者となって大阪 に大蔵省主計局長になり、 ながりがあった。この中島は後 問として中島税関長とは公のつ その頃、海港検疫所は税関長の 案に興味を覚えたのであった。 待つ間に楠本学長は細菌血清学 中島鉄平税関長を見送りに来た はコレラやベストの検疫業務顧 業務の中にあったので谷口教授 教室の谷口腆二博士の新奇な提 いた。それは大蔵省へ栄転する のだが少し早すぎて見送る人を 教授の熱心な意見に耳を傾けて た。(この項「阪大敏研」西 阪大微研誕生の原点ともな 楠本長三郎博士は谷口腆二

事柴田善三郎の賛同を取りつけ その後楠本学長は時の大阪府知 o楠本学長とその協力者

> ワクチン、 伝染病に関する臨床検査業務と から財団法人の基金として金五 微研創設費として金二十万円 資金を受けた。このようにして 万円及び金八万五千円也の事業 大阪府に寄附された。なお同 地の仲介で洋反物商山口玄洞が 地恭三、田代重右衛門、及び菊 たのを始め大阪実業界有名人菊 血清製造業を主とし

政府 立されこの時点において伝染病 人阪大微生物病研究会も同時設 大学微生物病研究所及び財団法 のち昭和九年六月六日国立大阪 国立に移管され大阪帝国大学医 現実のものとなるに先だち昭和 作成された。かくてこの計画が 要なる理由と」計画の申請書が te 学部となった。 六年五月一日付大阪医科大学は 「大阪府伝染病研究所設置

であることは熟知の通りである。 月六日は阪大微研の創立記念日 らにほかならない。なおこの六 強力な理解者と協力があったか べきである。と共にその周辺に 石となったものであると評価す 眼 第 この世紀の大事業が確立される (けいがん)とその情熱が礎 一歩は実に谷口腆二博士の燗

公益法人設立者代表の提出した o阪大微生物病研究会設立趣意實写 一、 医学の研究上より見たる 研究会設立の必要。

所なり。 学研究上深く考慮を要する を見るは、将来に於ける医 に対し、益々不便を生ずる い、最も重要なる総合研究 の欠陥たりというべく、 学との間に於て、連絡にラ 研究は、基礎医学と臨床医 現今、本邦に於ける医学の に近時分科の進歩発達に伴 しき恨み多く、是等は組 殊

の必

防疫医学研究の目的を達成 って大阪に本会を設立し、 到底東京の比にあらず。依 豊富と、採取の迅速なるは その防疫の当否は、 この意味に外ならず。 然も輸入伝染病研究材料の 家の休戚に関する所なり。 伝染病侵入の門戸にして、 去の実例に鑑みるも、 に、当阪神の地たるや、過 を設けられたるが如きも、 して、東京に伝染病研究所 に、先人の着目したる処に 的研究の緊要なることは日 伝染病等の如き、 玆に於て、 生虫病、その他微生物性各種 結核病、 殊に総合

が確立したのである。

予防用ワクチン類の製造と供給

料す。 歩発達を齎すものなりと思邦医学の研究に、一段の進せんとするものにして、本

り見たる必要。 便少なからず。 之を使用すべきものとして、 迅速にワクチンを製造し、 理想とす。即ち防疫の完全 流行型の菌種を用うるを ワクチン、血清類は完全な 伝染病予防治療に使用する 究と防疫の実際において不 するに止まるが如きは、 の官立伝染病研究機関を有 全国中僅かに東京に一ヶ所 を期せんと欲せば、流行地 る効果を収めんとすれば、 予防治療剤製造技術上よ 流行型の菌を以て 研

至るべし。 恐るべき結果を招来するに 剤の製造に、 関東大震災における実例を には流行病の附属すること たすべきこと明らかにして 伝染病研究並びに予防治療 能停止せんか我国に於ける 在の東大伝染病研究所の機 ること発生したる場合、 見るも、若し将来之に類す 国家的施設として必要。 天災地変非常時に際し、 殊に、天災地変 一大支障を来 現

> 財団法人阪大微生物病研究会 文部大臣子爵斉藤実殿 昭和九年一月十九日 して緊急の挙なりと信ず。 研究並予防治療剤製造機関 侵入の門戸たる大阪に之が 以外の地に於て将来伝染病 之が対策の一としても東京 堪えざるものあり。 を設置するは国家的施設と は古今その撥を一にするも 設立者 なるを想へば一層憂慮に 楠 本 長三郎 依って

胸に切々として訴えるものがあ 風格がにじみ出て、馥郁(ふく 救うために刀圭(とうけい)を 理的観点よりしても将来を洞察 న<u>్</u>త్ర 々たる古今の名文、かつ人々の いく)たるものが漂よう誠に堂 家的施設の必要を訴えた国土的 もって任ずる憂国の名医が、 らしさ、 した燗眼(けいがん)力のすば て、 治療剤製造技術上の観点より の研究上より、また伝染病予防 この設立趣意書を拝見して医学 あますところなく、また地 国民を外来伝染病より 国

でもあり、また一面「一卵性双法人阪大学徴生物病研究会の母体法人阪大学徴生物病研究所は財団大阪大学徴生物病研究所について

坪の敷地に鉄筋コンクリート浩 昭和八年堂島西町にある約一八〇〇 のであって唇歯輔車(しんしほ 年六月六日に国立阪大微生物病 しや)の関係にある。大阪府は るが同日に呱々の産声をあげた りどころ)については相違はあ 研究会が、創、 研究所と財団法人阪大微生物病 相互扶助の関係にある。 生児」とも呼ばれる程、 「微生物病に関する学術研究 の工事に着手昭和九年に完成 地下一階地上四階延八五三 設立の基本(よ 昭和九 密接な

一卵性双生児の所以

国立大阪帝国大学附属微生物病研究所創設

昭和九年六月六日

臨床検査業務など細菌学の基礎的研究

関機立

围

0

初代所長 楠 本 長三郎

三代所長 谷 口 腆

+

0

阪大微生物病研究会設立財団法人(民法第三十四条に依る公益法人)

昭和九年六月六日

ワクチン類の製造、供給

法 益 公

整備された。 整備された。 初代理事長(谷)口、腆・二・博・士

機関」として同年九月十五日で数年物病研究所」官制が公布である。これを以てしても明瞭なるように、研究所の基礎的研究の臨床応用部門としてその機能はととのい後に臨床研究部門能はととのい後に臨床研究部門能はととのい後に臨床研究部門を目的としたものであり密接不を目的としたものであり密接不を目的としたものであり密接不を目的としたものであり密接不を目的としたものでありっ活動によって伝染病予防ではなりである。

谷口典二博士は留学の の 英国留学時代の研

谷口腆二博士は留学のため昭和八年四月より十年三月まで英国八年四月より十年三月まで英国がグラスゴー大学病理、細菌学がグラスゴー大学病理、細菌学及を受学研究に従事されたので、一両教授の下に於て細菌学及免疫学研究に従事された。

に展開され免疫学の発展に組み えはパストウールによってさら 防接種の起原となった。 ジェンナーの種痘法が今日の予 ある天然痘の感染を防ぐという 牛痘と免疫学的に特異的関係に れのない牛痘の材料を接種して 起原は人に重い病気を起すおそ かれたのである。 ない。)をもっているのに気づ ッジに注射しても抗体の産生は 例えばヒツジの赤血球をウサギ 種属のものでなければならない に接種するために、 ワイル病原スピロヘータを家鬼 に注射すれば抗体が出来るがヒ 注射した。この家兎の血清が山 ット肝臓をすりつぶして家兎に (抗原は相手の動物に対して異 れられ、 ・や羊の赤血球を溶血する抗 今日の予防接種方法 予防接種の 感染モルモ その考

オルスマン抗原とワッセルマンが定着するに至った。これがフ

せられ 鎮として免疫学の泰斗の域に達 の責任者となられ、 原性そのものを問題にした研究 帰国せられてから谷口博士の抗 けである。 ことが谷口博士の滞英時代の大 抗原が類脂体抗原である。 ば免疫学理論的研究であったが いなる研究の出発点となったわ この種の研究はいわ 後にその重

製造を始めようとしていた渡辺 観音寺八幡町でそのワクチンの て製造することが問題になって 疹チフスワクチンを鶏卵を用い 覚えている。 でDDTを服の上から真白にふ はうまく行われた。 が米軍によって供給されて防疫 の発疹チフスワクチンとDDT 疹チフス対策としてアメリカ製 さばって流行するものである。 欠乏と不潔が重なりシラミがの 見れば瞭然のことであって食糧 が敗戦病であることは世界史を のになっていった。発疹チフス り二十一年になると全国的なも 日本の発疹チフスの流行が始ま 来た炭抗労務者に端を発して、 昭和十九年の頃満州から連れて この昭和二十一年には幸いに発 ○谷口博士と観音寺市の奇縁 かけられた経験は私も今でも

もいた。臨床医とも一寸違った 者も幾人かが彼の周辺に集って に熟練していてその方面の技術 る陸軍技師でリケッチァの扱い 政次陸軍軍医中将の輩下に属す て関東軍の防疫給水部隊長北野 京慈恵医科大学の卒業生であっ 口腆二博士を訪ねて来阪してき 栄という開業医が阪大微研の谷 一種独特の技術の持ち主であっ この渡辺栄という医師は東

そんな時たまたま香川県 そのような時に発 到るところ たし、

辺栄の話の内容の重大さを知っ 良臣教授を訪ねて来たのだが渡 研究会の理事長にもなった奥野 あった頃堀田氏を通してその後 大学教授堀田博士が京大助手で れで一応の見通しと自信がつい 容易だという動機もあった。 地柄で鶏卵の入手供給が比較的 当時も全国養鶏が最も盛んな十 県の観音寺周辺と鹿児島県とは いたったのである。もっともそ 発疹チフスワクチンの製造を思 も得たであろうが鶏卵を用いて は観音寺の有力者であった。 た段階で渡辺栄は旧知の現神司 (中略)資産的にも夫人の実家 は今日でもそうであるが香川 その夫人の実家の山本家 最 製造を目論んでいるところであ チンを製造することを決意され 私は思う、 次郎より抜萃による。 医薬芳名録、 しい話でもあった。 っては意外なことであったし嬉 を提言されたことは渡辺栄にと の堀田京大助手を通したのだっ 口博士を訪れる勇気がなく友人 阪に出て来たのであるが直接谷 研の協力か助言を得るために大 師も勿論知っていた。 てみませんか?」というのであ すが、その発疹チフスワクチン 景が強力であることも、 の資力、用地獲得についての背 とを見抜いたし山本家を含んで 橋の研究陣より前進しているこ いるうちに渡辺が実技に於て石 たが、その谷口膜二氏から協力 の製造の仕事を僕と一緒にやっ たにお目にかかるのは始めてで と谷口博士は「渡辺さん、 それで長い渡辺の話を聞き終る い触覚で谷口博士は感知した。 高峰の人であることは渡辺医 た。谷口腆二博士がその道の それで渡辺の話を聞いて この発疹チプスワク 阪大微研」

20

ころである。 隆のため誠に慶賀にたえないと は誠に心強いことであり斯道風 成に精進が行なわれていること 立目的に向って日夜その使命奉 物病予防と治療機関としての設 る。かくて観音寺研 後発展の途をたどり病原微生 究所は

たことにつき深くお託びを申上 生物病研究会 三郎先生の「財団法人 終りに臨んで文中所々に藤野 一博士」など無断使用致しまし 創設者 谷口腆 阪大微

あな

げます。 9

すぶ。 げられた立子夫人にあらためて 先生のご霊前に呈して拙稿を がある」このお言葉を谷口腆一 ここに深甚の敬意を表すると共 いぶき続ける「内助の功」を捧 人家庭に今なお、 古くて新らしい言葉として日 には国境はないが学者には祖国 に生前谷口博士ご愛誦の「学問 暴言多射御叱正を。 脈々として、 Ü

その鋭

財団法人阪大微生物病研究会の 組織 〈概 略

· 승 丁法 部

理

專

実は阪大器

業 部 **→観音寺研究所** 1大阪 本 部

恵医大卒業元陸軍技師医師渡辺栄の協力申出等谷口博士と これは昭和十九年頃旧満州国より入国した炭坑労働者より の肝騰相照らすところより急速に製造発展となる。 発疹チフスワクチンの製造道程は観音寺市在住の東京慈

ワクチン類を研究開発製造して公益事業に貢献して ロー凡そ微生物に関する広汎な分野に予防と治療を目標とし 生物学的製剤 治療剤

「この項新

端を発し昭和二十一年全国的蔓延、 研は開発準備に着手した。

この時において阪大微

西川虎

テリア破傷風混合トキンイド、 テリア、 日本脳炎ワクチン、 破傷風混合ワクチン、 乾燥弱毒生風しんワグチン、 インフルエンザワクチン、乾燥弱毒性麻 その他 コレラワクチン、 百日咳、 沈降ジフ 当ジフ

士もまた発疹チフスワクチンの のであった。丁度その頃谷口博 谷

口腆二博士の部屋へ案内した

を通じての愛国心の発露による

からみて谷口腆二博士の防疫

大決断であったことと思惟す

て奥野博士は渡辺を連れて自ら

るに至ったことは当時の内外情

細菌血清学部長兼防疫学部長ヲ命ス	一細菌血清学部	*	九、十	和	昭
ヲ嘱託ス	ラ嘱託ス しんしゅう しんしゃ しんしゃ しんしゃ しんしゃ しんしゃ しんしゃ しんしゃ しんし	七、	九、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、	和	阳
が託ス 医学部附属医院 大阪 帝国 大学	防疫委員ヲ嘱託ス	· <u> </u>	七、六	和	昭
ヲ命ス	細菌学講座担任			//	
帝国大学教授高等官三等 内 閣	任大阪帝国士	E.	六、	和	昭
	賞受領				,,,,,,
新聞社寄附東宮御成婚記念 帝国学士院	新聞社寄附市				
鼠咬症病原研究ニ対シ大阪毎日	鼠咬症病原研	一、 十 五	五	和	昭
大阪税関検疫医務ヲ嘱託ス 大蔵省	大阪税関検疫	二九九	四、五	和	昭
ス	神戸税関検疫医務ラ嘱託		三、七	和	昭
血清学担任ヲ命ス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	細菌血清学知			"	
血清学科長ヲ命ス 大阪医科大学	細菌血清学科			"	
子教授 文部省	大阪医科大学教授			"	
公立大学教授三任ス高等官四等 内 閣 医プ学)	公立大学教授	十九九	二、九	和	昭
子位ヲ授ク(論文提出東京帝	医学博士ノ学位	士、	+	Œ	大
光所技師 内 閣	任伝染病研究所技師	七、六	+	Œ	大
	帰朝	六、四	+	Œ	大
二於テ細菌学免疫学研究	教授ノ下ニが				
グ及ロバート・ミューアー両	ブラウニング				
数室三於テーシー ・エツチ・	病理細菌学教室ニ於テスゴー大学				
ンドサットン研究所及グ	英国倫敦ブラ	· 四	八 2 二	E	大
伝染病研究所治療研究業務ヲ嘱託ス	伝染病研究所	一三共	五十二、	Œ	大
	任防疫官	十八八	五、九、	E	大
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	事		月日	年	
	-	習修了	伝染病研究所講習修了	染病	伝
東京帝国大学医科大学卒業		高等学校卒業	\mathbb{H}	六 (岡	第六
明治二十二年二月十五日生	明治一				
腆二	博士 谷 ロ	医学博士	正三位勲二等	三位	E
部し	<u> </u>	歴		esan.	

昭和二九、 昭和 昭 昭 昭 昭和二六、 昭和二三、四、 昭和二二、 昭和三六、二、 和二八、 和二七。 和三二、 和 + Ė 士 = = 士 = 士 = 七、 四 四、 四 74 四 四 三十一 三 十 ΞΟ + 九 九 七二歳で永眠された 生物学的製剤等基準調査 従三位に叙する П 取扱を命ずる 大阪大学微生物病研究所長事務 大阪大学医学部長に補する 第二回日本学術会議会員 細菌血清学部長を命ずる 補微生物病研究所長 支那へ出張を命ス いたします。 選挙に当選する 防疫学部長、化学療法研究部長 臨時対支防疫事業部事務嘱託ス を兼ねて命ずる 委員会専門委員を命ずる 本細菌学会名誉会員に推戴 名誉会員第十号 中央選挙管理会 微生物病研究所 財団法人同仁会 日本学術会 議 微生物病研究所 挙 管 理 会 喜学日 受長 趣 郎川 菌 文部省 文部省 厚生省 文部省 外務省 文部省 文部省 文部省 畏

府

政 Æ

J ŋ

事が行われる予定です。 大阪府衛生部では次の主な行 薬と健康の週間 の愛護週間 10月17日~ 23 日

期 麻薬覚せい剤禍撲滅運動 10月~11月 10月10日~16日

狂犬病予防月間

10月中

精神衛生普及月間 期 寄生虫病予防旬間 11月21日~ 30 日

食品等年末一斉取締 献血推進月間 12 月 中 11月中

めにその生涯を捧げられたかを証明するものである。

この略歴の一端を以てしても故谷口博士が伝染病の予防と治療のた

仝 仝

+ +==

正三位に叙する

銀杯一個を賜わる

仝

0

+

特旨を以て位一級追陞せられる

仝 仝

0